

波荒くとも

小川未明

青空文庫

なまりいろ鉛色をした、冬の朝でした。往來には、まだあまり人通りがなかったのです。ひろみちの中央を電車だけが、潮の押しよせるようなうなり声をたて、うす暗いうちから往復していました。そして、コンクリート造りの建物の多い町の中は、日の上らない前の寒さは、ことに厳しかったです。

十三、四の小僧さんが、自分の体より大きな荷を負って、ちやうど押しつぶされるようになかつこうをして、自転車に乗って走ってきたが、突然ふらふらとなつて、自転車から降りると、そのまま大地の上へかかんでしまいました。そこは石造りの銀行の前でした。堅く閉まったとびらが、こちらを向いてにらんでいるほか、だれも見ているものがあります。少年は、しばらくじつとしていたが、そのうちはうようにして、やつと背中せなかの重い荷物を銀行の入り口の石段の上に乗せて、はげしく締めつける胸の重みをゆるめたが、まだ気分が悪いとみえて、後ろ頭を箱につけて仰向けになつたまま目を閉じたのでした。小さな肩のあたりが、穏やかならぬ息づかいのためにはふるえています。小

僧^{ぞう}さんは、こんなにして倒^{たお}れていたけれど、ときどき思^{おも}い出^だしたように電^{でん}車^{しゃ}のうなり音^{おと}が訪^{おとず}れてくるほかは、だれもそばへよつてきて、ようすをたずねるものもありませんでした。

この少^{しょう}年^{ねん}は去^き年^{ねん}の秋^{あき}、田^い舎^{なか}から叔^{おじ}父^ふさんを頼^{たよ}つて上^{じょう}京^{きやう}しました。そして、あの製^{せい}菓^か工^{こう}場^{じやう}へ雇^{やと}われてから、まだ間^まがなかつたのです。今朝^{けさ}も取^{とり}次^{つぎ}店^{てん}へ品^{しな}物^{もの}をとどけるために出^でかけたのでした。二、三日^{にちまへ}前^{まえ}からかぜぎみで寒^{さむ}けがしていたのですけれど、すこしぐらいの病^{びやう}気^きでは仕^し事^{ごと}を休^{やす}むことができません。彼^{かれ}は、無^む理^りをして自^じ転^{てん}車^{しゃ}を走^{はし}らせたのです。すると、冷^{れい}水^{すい}を浴^あびるように、悪^お寒^{かん}が背^せ筋^{すじ}を流^{なが}れて、手^て足^{あし}までぶるぶるとふるえました。

「こんな病^{びやう}気^きに、負^まけてなるものか。」
彼^{かれ}は、歯^は齧^がみをしました。いくら力^{ちから}を入れても、力^{ちから}の入^{はい}らない足^{あし}をもどかしがりました。すると、今^{こん}度^どは体^{からだ}が火^ひのように熱^{あつ}くなつて、耳^{みみ}が、ガンガンと鳴^なり、目^めの中^{なか}までかつかとしてきました。これはかなわぬと思^{おも}ううちに、足^{あし}が重^{おも}くなつて、もう一^ぼ歩^ぽも前^{まえ}へふみ出^だせなくなつてしまつたのです。それから後^{あと}のことは、すこしもわかりませんでした。

「雪のあるのは、ここだけだ。村の往来へ出れば、人通りがあるし、歩くのが楽になるからがまんをしろよ。さあ、私の後についてくるだ。」

重い荷を背負って、先に立つて母親が歩きました。少年は後からついていきます。母親の負っている行李には、少年の着物や、いろいろのものが入っていました。

「東京は、雪がないというから、結構なこった。あっちへ着いたらすぐに便りをよこせよ。」

「叔父さんが、停車場へ迎えに出ていてくれるかい。」

「待っていてくださるとも。それでも、所番地書いた紙をなくすでないぞ。」
峠を上ると、小鳥が、そばの枯れ枝に止まってさえずっていました。

「つぐみみたいだなあ。」

少年は、しばらく立ち止まって、それに見とれていました。こんな小鳥といっしょに山の中で暮らしているほうが、東京へいくよりは幸福のように感じられたのです。いつのまにか母親の姿が遠くさきへいってしまいました。少年は驚いてその後を追ったが、どういふものか足が重くて、なかなか動きません。いくら早く走ろうとしても足が進みません。ただ気が急いで、体をもだえているばかりでした。

小僧さんは、苦しいうちに、こんな夢を見ているのでした。

二

町の商店に、女中をしているみつ子は、ちょうどお使いに出て、銀行の前を通りかかりました。

「あら、小僧さんが、どうしたんでしょう。」

みつ子は、少年のたおれているところへきました。見ると、その顔色が真っ青になつています。そして、苦しうに息をしていました。

「ねえ、気分がわるいの？」と、彼女は、聞きました。けれど、小僧さんは、なんとも答えませんでした。

「気分がわるいの？」と、彼女は、こんど耳もとへ口を近づけて、いいました。けれど、小僧さんには、答えるだけの気力がなかったのです。

「かわいそうに、こんな大きな荷物を負わせて、寒いのに働かすからだわ。」

「重いでしょう。私、あんたといっしょにお家へいってあげるわ。そして、ご主人に

よく話してあげますから、お所をおつしやい。」

こういつた、彼女の目の中には、いつか涙がわきました。しかし、少年は意識がないのか、返事がなかつたのです。

「きつと、病気なのもかもしれない。それなら早くお医者に見せなければ……。」

彼女は、自分がお使いに出て、主人の待つてゐることも忘れていました。

みつ子は、このことを交番に届けなければならぬと考えました。さつそく交番の方へ走つていきました。彼女のいうことを聞いた、巡査さんは、

「朝飯を食はずに出て、つかれたのではないか。」と、軽く想像しました。

「いえ、顔色が青く、たいへんに苦しそうです。」と、みつ子はいいました。みつ子は、今年十六になつたのです。

「いくつぐらいの子供かね。」と、奥の方にいた、もう一人の巡査が、たずねました。

「十三、四の、まだ小さい子供です。」

彼女は、こう答えると目頭が熱くなりました。自分の弟の姿が浮かんだからです。「急病かな。」と、その巡査さんは、すぐに起ち上がつて、交番から出ました。

彼女は、銀行の前へその巡査さんを案内しました。このときは、すでに四、五

人も小僧さんのまわりに立つていました。巡査さんは、小僧さんの顔をのぞきこむようにして、なにかたずねていたが、少年の言葉は、そばにいるものにさえ聞きとれませんでした。

巡査さんは、ふいに顔を上げて、左右を見まわしながら、いいました。

「だれか、手をかしてくれませんか。病人を交番までつれていくのだが。」

「よし、おてつだいしましょう。」

労働者ふうの男と、勤め人ふうの若者が、前へ出ました。労働者は、少年の負っているお菓子の入っている箱を、勤め人は、自転車をし、巡査さんは、小僧をだくようにして、つれていきました。

みつ子は、もうこれでだいじょうぶだと思つて、銀行の前からはなれたのです。

三

みつ子は、歩きながら、自分の弟のことを思い出していました。ちようど年ごろもあの小僧さんと同じくらいです。雪まじりの北風の吹きつける窓の下で、弟は父親のそば

でわらじを造つたり、なわをなつたりしているであろう。下を向いて、だまつている父親は、

「すこし休めや。」と、ときどき顔を上げていうであろう。そして、炬に枯れ枝や、松の落ち葉などを入れるであろう。しばらく、青い、香りのする煙が、もくもくとしているが、そのうちにぱつと火が燃えついて、へやのすみまで明くなる。遠くで、からの鳴き声がある。弟は、自分から送った少年雑誌を出して、さも、大事にして楽しそうにして開いて見る。弟は、めずらしい写真に見入ったり、また書いてあるおもしろそうな記事に、心を奪われて、いろいろの空想にふけるであろうと思つたのでした。

「あの小僧さんは、あれからどうなつたらう。」と、彼女は、一日仕事をしながらも思つていました。

そのうちに日が暮れて、その日の用事が終わると、彼女は、自分のへやへ入つて、このあいだ、弟の清二からきた手紙を出してなつかしうに、また読み返していたのです。

「姉さん、僕、雪の消えるのを待つているんだよ。そうしたら今年はお父さんと裏のかや山を開墾して、畑を造るのだ。枯れ草に火をつけていたり、根を掘り起こしたりするのが、いまから楽しみなんだ。そして、兄さんが、凱旋していらつしやるまでに豆をま

いたり、芋を作ったりしておいて、兄さんをびつくりさせるんだ。なぜなら、兄さんだつて、あのかや山には、ちよつと手がつけられなかったのだからな。姉さん、僕は、満洲へでも、どこへでもいけるよ。僕がいくときは、隣の徳ちゃんも、いつしよにいくというんだ。二人でなら、うちのお父さんも許してくださいと思つてゐる。姉さん、なにか満洲のことを書いた本があつたら、どうか送ってください。僕、とても見たいのだから……。」と、書いてありました。

みつ子は、いつも弟の元氣でゐるのをうれしく思いました。そして、たえず希望にもえているのをなんとなくいじらしく思いました。しかし、これからの世の中へ出て、ひとり立ちしていくには、どこにいても、今朝の小僧さんのように辛いめにもあうことがあるだろう……。そして、それに打ち勝つていかなければならぬのだと思うと、また、心の中が暗くなるのでした。

「どうぞ、神さま、小さな弟や、弟のような少年をば助けてやってください。」と、みつ子は、へやの中でしばらく瞑目して合掌していたのであります。

翌日、みつ子は、用達の歸りに、わざわざ交番へ立ち寄りしました。小僧さんのよすを聞きたかつたからです。やはり病氣をがまんして、重い荷を負つて出たためにた

おれたのだということでした。そして、小僧さんは、主人を呼び出して引きわたされたというのであります。

「小さくて、家のため、親のために働くような子供は、みんな感心な子供だから、よくめんどろをみて、しんせつにしてやらなければならぬと、主人にいいわたした。」と、巡査さんは、いわれました。

「ほんとうに、そうです。」と、みつ子は、深く感じたので、丁寧に頭を下げ、交番を出しましたが、道を歩きながら、もし、その主人というのが、薄情で、ものわからぬ人物であつたらどうであろう。自分のしかられたことを恨みにもつて、かえつて哀れな小僧さんをいじめはしないかしらと考えると、やさしいみつ子の心にはまた新しい心配が、生じたのでした。

「そんなことはないわ。そんなことがあれば、またしかられるでしょう。きっと、主人は、ああ自分が悪かつた、不注意だつたとさつて、これから、あの小僧さんや、ほかの小僧さんたちをかわいがるにちがいない。みんな日本人ですもの……。」

彼女は、自分の心配が、つまらない心配であることを知つたのであります。

四

ここは、町に近い郊外でした。ある長屋の一軒では、父の帰りを待っている少年年がありまして。いつもいまごろは、弁当箱を下げて会社社からもどってくる父親の姿を彼方の道の上に見るのであるが、今日は、まだそれらしい姿が見えません。

「早く帰っていらつしやればいいに、三ちゃんが、病気できているのになあ。」と、少年は氣をもらっていました。仕事の都合で二電車ばかりおくれた父親は、黒の外套に、鳥打帽をかぶって急いできました。むかえに出ている俵を見つけると、

「吉雄や待っていたのか、さあ、寒いからお家へ入んな。」といいました。

「三ちゃんが、病氣になつてきて寝ているよ。朝、自転車で走っているうちに、氣分がわるくなつて、たおれたんだつて。」

「なに、道でたおれたんだつて？ どんなくあいだ、医者に見てもらったか。」と、父親は、驚きました。

「工場の医者に見てもらったのだから、お薬びんを持ってきたよ。」

「熱が高いか。」と、父親は、急ぎ込んで聞きました。

「お母さんが氷まくらをしてあげたら、すこし下がったようだ。いま、よく眠っている。」
 小僧さんは、工場に寝ているところがないので、叔父さんの家へ帰されたのです。叔父さんの家は、やはりろくろく寝るところもない狭い家でありました。そして、貧しい暮らしをしていました。小僧さんの名は三郎といって、田舎から、この叔父さんを頼つてきたのです。そして、いまの製菓工場へ見習い小僧に入ったのです。しかし叔父さんも、叔母さんもやさしい人であつたし、二つ年下の吉雄くんもすぐ仲よしになつたので、三郎は、公休日には、かならず叔父さんの家へ帰るのが、なよりの楽しみだつたのです。叔父さんは、玄関を上がると、

「三郎が病気で、きているつてな。」といいました。

「流、感らしいんですね。肺炎になるといけないから、いま湿布をしてやりました。」と、叔母さんが、答えました。

「朝、寒いのに自転車で走つたからだ。大事にしてやれば、早くなおるだろう……。」
 「人中へ出ていますと、気を使つて、がまんをしますし、まだ年のいかにないのに、かわいそうです。」

「なにしろこういう世の中だから、体も、心も、よほど強くなければ打ち勝つてはいかれ

ない。」

「三ちゃん、親戚だけど遠慮していませんよ。」と、叔母さんがいいました。

叔父さんは、足音をたてぬようにして、三郎の寝ているへやへ入りました。三畳のへやには、すみの方に吉雄の机が置いてあつて、そこへ床を敷いたので、病人のまくらもとには、葉びんや、洗面器や、湯気を立たせる、火鉢などがあつて足のふみ場もないのです。しかし、ここばかりは、冬とも思えぬ暖かさでありました。叔父さんは心配そうに、病人の顔をのぞきこみました。よく眠っています。

「顔色はいいようだ。これならだいじょうぶだ。」

叔父さんは、へやから出ると、こういいました。

昨日あたりから、あたたかな風が、吹きはじめました。もう春がやってくるのです。吉雄の学年試験も終わつて、来月からは六年生になるのです。三郎は、また病気がなつて、これも来月のはじめから、工場へ帰ることになりました。二人は、ここ数日間を楽しく遊ぼうと緑色の芽が萌え出た堤の上まで、出てきたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学五年生」

1939（昭和14）年3月

※表題は底本では、「波《なみ》荒《あら》くとも」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

波荒くとも

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>